
勇者が俺達に教える事

鉄の字

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

勇者が俺達に教える事

【Nコード】

N9570S

【作者名】

鉄の字

【あらすじ】

普通の男子高校生、篠原聖司は桜崎高校にとある学科に通う事に！その学科の名は“勇者科”！！
そしてたった三人しかいない教室にやって来たのは本物の勇者！？

今、普通の聖司と普通じゃない日常が幕を開ける！！

「お前らには魔王を倒してもらつ。」

「あんた頭大丈夫か？」

「シネ。」

「ぎゃあああ！！！」

幕を開ける！！

プロローグ（前書き）

どーも！鉄の字です！！

これから頑張っていくのでよろしくお願いします！！

プロローグ

ある所に勇者がいました。

勇者は数々の危機を仲間達と乗り越えとうとう魔王と対決しました。

激闘の末、勇者が勝ちました。

しかし、魔王はこう言いました。

「我はまた復活する！もうこの世界にはお前を継ぐような勇者はいないだろう！我が復活するまで恐怖に怯えてるがいい！！クハハハハハハハハハハゴフウ！！」

勇者は途中でウザくなったので笑う魔王の顔面にエルボードロップをしました。

勇者は考えました。魔王の言ったとおり勇者が住む世界にはもう自分を越える勇者がいらないからです。自分が戦うにも体がボロボロで前みたいに戦えるか分かりません。

そこで勇者は思いつきました。

この世界にいないなら他の世界に行けばいるんじゃないかと。

早速勇者は倒れた仲間達を一人ずつボディプレスで起こしました。そして仲間達にさっきの事と自分に付いてきてくれと頼みました。もちろん仲間達は首を縦に振り、すぐさま魔法使いは次元魔法を唱えました。

新しい勇者を探す為に

1 時間目：勇者さん？

「はあ……」

これで一体何回目の溜息だろうか？

俺の名は篠原聖司。このはりせいじ普通の男子高校生だ。今年からここ桜崎高校に入学した。

俺は今、教室の中に一人でいる。まあ、教室の中に机が3つしかないのはあまり普通ではない。

しかし、それよりも普通じゃないのは俺が通うコースの事だ。

そのコースの名は“勇者科”だ。おかしいだろ。おかしいって指差して笑えよ！！コンチクショ！！！！

ああすまない。少し興奮していたみたいだ。しかし、何故俺はこのへんちくりんなコースに入ったかと言うと、あれは数ヶ月前……

もうすぐ高校の願書を出さないといけないので願書を書いていた時の事だ。

ピンポーン

家のチャイムが鳴り、手を止めて玄関へ。

ドアを開けるとそこには一人の女がいた。

スーツを着ているが、それとは不釣り合いな黒い帽子を被っていた。そして帽子に無理矢理入れた銀髪が見え隠れしていた。

「こんばんわ。夜分遅く申し訳ございません。篠原聖司さんですね？」

「あーはい、そうです。」

「私は桜崎高校の者です。今日はあなた様にとある知らせを届けにまいりました。」

へ？おれに？

「聖司さんには桜崎高校の勇者科に入ってもらいます。」

……………あーなるほどね。

すぐさま電話の下にある棚から ウンページを取り出す。
何枚かページを捲り……………お、あった。

「今から言つ番号を憶えて「精神科医なら間に合ってます。」

こいつ……………慣れてやがる……………ただ者じゃない……………！

「とりあえず話を聞いて「断る。」

女の言葉を遮りドアを閉めようとするが女が足を挟んで止めやがった。

「お願いです！！話を聞いて下さい！！」

「嫌だ！無理だ！帰れ！精神科医に行け！！」

「お願いですから！！」

女の足をガンガン蹴りながらドアを閉めようとするが女の力が強く無性にもドアが開いてしまった。

俺、女に力勝負で負けちゃった……………。

「はぁ…はぁ…うゝ、だから私は嫌だって言っただんです。優雅さんのバカ…………。」

何かブツブツ言いながら鞆から書類を出して俺に渡してきた。

「この書類に勇者科について書かれています。もしも、あなたが勇者科に入りたいのならこの書類を桜崎高校に提出して下さい。ちなみに試験は受けなくていいのです。」

それだけ言つと女は「では。」と言つて帰ってしまった。

「勇者科か…………。」

女が帰つた後一人でポツリと呟く。

俺には物心が付いた時から親がおらず、隣に住む叔母さんに育てられてきた。

今更心配する人なんて誰一人としていない。

と思うが俺は成績がとても悪いため試験が無いのが魅力的に感じた。

そして気がつけば勇者科の書類を書いていた。

「はぁ…………。」

はい回想終了。

おつとまた溜息が出てきた。
因みにまだ二つの席は空いたままだった。
誰か早く来ねえかな。

ガラガラ

「あり？まだ一人しかいね。てか席3つかよ！！」

俺がそう思ったら教室のドアが開いてそこから一人の少年がいた。
見た感じ髪は茶髪ツンツン頭で、服の上からでも分かる筋肉。とにかくマツチヨな少年だ。少年つつても俺と同じ年だが。

「えーと、ここに座れば良いのかな？」

「うん？そうじゃねえの？」

「そっか。」

その少年は俺の席の隣に座った。

「あ、自己紹介まだだったな。俺の名前は黒金鋼^{くろがね はがね}。よろしく！」

「俺の名前は篠原聖司。よろしく。」

そう自己紹介してお互い握手をした。

「なあ、黒金もさ変な人から推薦が来たのか？」

「鋼でいいぜ。まあ、変なのは来たな。」

「俺も聖司でいい。やっぱり来たか。」

やはり鋼の所にも。どうりであの女慣れていたんだな。

ガラガラ

「あれ？二人だけ？てか席3つ！！」

ドアを開ける音がしたから会話をやめて扉を見ると鋼と同じ反応をした女の子がいた。

髪は背中まである黒髪、顔は結構可愛い女の子だ。

「えーとここに座れて事だね？」

女の子は雅人の隣に座った。

「あ、えーと、私の名前は白鷺^{しらぎ}時雨^{しぐれ}。時雨って呼んでね。」

「俺は篠原聖司。よろしく。」

「黒金鋼。同じくよろしく。」

「聖司に鋼だね。よろしく！」

やーとこれで全員揃ったな。

時雨に話を聞くと時雨の所にもあの女が来たらしい。

ガラガラ

またドアが開きそこには白いシャツの上に黒いパーカーを羽織った

男がやって来た。

「んあ？これで全員か？つっても席3つしかねえしな。見りや分かるか。」

なんだこいつ……

「よし！少し自己紹介するか！」

男は首をコキコキ鳴らしながらこんな事を言った。

「この勇者科の担任をする城南しろみなみ優雅ゆうが元勇者だ！これから4649
(よろしく)！！」

「「「はあ！！？」」「」」

俺の普通の日常はもうすでに消えていた。

2時間目：これが勇者！

「「「勇者！？」」「」

「ああ、勇者だ。」

突如俺達の前に勇者と名のる男が現れた。

「勇者ってあのRPGに出てくるあの勇者！？」

「だからそう言ってたんだろ。」

即答かよ。

と言うかあの女が言ってた優雅さんってこの人かよ。

「あの～？」

「んあ？」

恐る恐る鋼が手を挙げる。

「頭大丈夫ですか？」

「死ね。」

バギィ！！

「へブア!!」

「鋼!？」

一瞬の内に鋼の近くに行き、体格がゴツい鋼を殴り飛ばした。
鋼は変な声をあげながら教室の壁に激突した。

「俺を変な奴だと思った奴は容赦なく殴りつけるのでそこんところ
よろしく。」

全然よろしくねえよチクシヨー。

「あいたた……」

鋼が殴られた場所を摩りながら帰ってきた。
お前壁にめり込んでたのによく生きてたな。さすがマッチョと言っ
た所か。

「あゝ。」

次は時雨が手を挙げる。

「何だ。変な事言ったら殴るぞ。」

女の子にも容赦無しかよ!

「いえ、できたら何か証拠的な物はないですか？」

先生の鋭い視線にも負けず時雨は言った。強い女の子だ。
確かに何か証拠があれば信じるんだが。

「あるぞ。『ファイア』。」

ボウッ!!

また即答で呪文みたいなのを唱えると手から炎が飛び出し、そのまま鋼の頭に……

鋼の頭……？

「アチャアアアアアアアア！！！マジで燃えてる！！マジで燃えてる！！俺の頭が！！！！あ、でも以外と熱くない？アチャチャチャチャ！！やつぱ熱い！！？」

「鋼！？うおおお！！？今消すぞ！！！」

「鋼君！？ヤバイよ！？水どこ！？水どこ！？」

慌てる俺ら。

それを先生は笑いながら見ていた。
てゅーか助けるよ先生！！

必死の消火活動により鋼の髪を少し残す事に成功。
本人の髪はなんと立派なパーマになっていた。

何か髪が増えてないか？

まいつか。どうせ数時間後には戻ってるし。それがコメディの掟。

「これで俺が勇者だって分かったろ？」

ええ、よく分かりました。特に鋼は

「今日は話す事ないからもう帰っていいぞ。」

じゃあ何故俺の髪は燃やされたの？と言う視線で先生をにらめ続ける鋼。

ドンマイ。

俺達は重たい腰を上げて立ったら先生が時間割を渡してくれた。

廊下を歩きながら時間割を確認する。

一時間目 勇者学

二時間目 勇者学

三時間目 勇者学

四時間目 勇者学

昼休み

五時間目 勇者学

六時間目
ちえけらー

どう反応せえと？

その場にいた俺達はそう思った。

3 時間目：寮の管理人は使い魔！？

「はぁ……」

ふっ、これで何回目だろうなマジで。

どうして始業式でこんなに疲れるのだろうか？

勇者が現れ、魔法をだして、友人の髪の毛が燃える。

何かもうすっかり非日常になっちゃいました。普通こつ言うのは徐々に非日常になって行く物だ。いや、これから非日常になって行くんだろう。

「「はぁ……」」

おお、ここにも仲間が。

俺らが通う桜木高校は寮制で希望者は寮で暮らすことが出来る。

んでもって俺達はその寮に向かって旧校舎から歩いてきた。

ああ、説明し忘れてたけど俺たちの勇者科は普通の高校生がいる新校舎の背後にある森を数十分歩き続けた旧校舎にある。旧校舎には普通の高校生は全くないらしい。

「本当に今日は疲れたな。」

「俺の髪燃やされたからな。」

「ドンマイだね鋼君。」

上から俺、鋼、時雨という感じで話しています。

鋼の髪の毛は今は見事に元に戻っている。恐るべしコメディの力。そつこつ話している内に俺達は寮に着いた………着いたんだよね？

「これ寮？」

「デカすぎねーか？」

「道間違っ たつけ？」

デカイ……！とにかくデカイ……！

これはそこのマンションと桁がちがう。

何となくビルに見えなくもない。

とにかく確認のために名札を見してみる。

『桜木高等学校寮

“ 永遠の眠り ♪ ”

』

どうする俺。

ここはツツコミを入れるべきか？

いやまだ大丈夫だ。まだイケる。

「何で永遠の眠りなんだ……！！殺すのか！？殺す気なのか俺らを！？」

あらら、鋼が何かツツコンじゃったし。

「まあまあ、落ち着いて。早く寮母さんに会って部屋に行きましょう。」

ツツコむ鋼を宥めながら時雨は寮の中に入っていく。

中は何ともまあ高級ホテル顔負けな内装だった。

何かいちいち気にするのも疲れたな。

「あ、ここで寮母さんと呼ぶのかな？」

入って右側にホテルで言うフロントみたいな所があった。呼んでみつか。

「すみませ〜ん。」

「はい。」

お、返事をしたって事はいるみたいだ。でも何か聞いた事のある声だな。何となくあの時に来た女に似た声だな。

「あ、新入生さんですね？じゃあ生徒手帳に書いてある生徒番号を言つて下さい。」

出てきた寮母さんはこの世界ではあまり見ない白髪。
うん。あの女だな。

「よお。久しぶりだな。」

「何を言ってるんですか？私とあなたは初対面むぐあ！？」

シラを切る女に俺はアイアンクローをして女を持ち上げる。
こつ言う時、俺は怒りで人の何倍の力を出したりします。

「てめーが家に来たせいで俺等は酷い目にあつたと思っただぞ！！」

「思っんならどうしてアイアンクローをいたたたたたた！！！！」

「俺も髪の毛マジで燃やされたんだぞ！！」

「ちよつ、何で何処からともなく金槌を取りだすのですか！？あ、やめて！！脛だけは！！金槌で脛を狙わないで下さい！！」

「えい……えい……」

「あなたは何もないでしょ！？アヒヤヒヤヒヤ！？お願いです脇をこしょばさないで痛いのと笑うのが合体して私、どうすればいいかわかりませーん！！！！」

数十分後

「うぐつ、ヒッグ。」

今、女こと寮母さんは涙目になりながら俺等の前に正座されていた。え、女に酷いことするな？んあ？舐めてんのかワレコラ。

「とりあえず何で寮母さんのあなたはが俺等の家に来たんだ。」

怒りで忘れてたけどよくよく考えてみれば寮母さんが教師でもないのにどうして俺等の家に来たのだろうか？

「グスン。そ、それは優雅さんを知ってますよね。」

「まあ、こっちはもう魔法を見たから信じますが。何で私達の家
に？」

時雨が寮母さんに尋ねる。

「はい、何と云うか優雅さんがいちいち他の家に行くなんてめんど
いと言われたので……」

ああ、何となく話が見えてきた。あのドSな勇者と寮母さんの様子
を見る限り考えてみれば何となく結末は見えてきたな。

「うん、ご苦労さん。」

「ありがとうございます……あ、これ皆さんの鍵です。」

「おお、サンキュー。」

「聖司君、軽すぎよ。」

時雨が何か言ってるか気にしない方向で。

「では私は戻りますよ。」

そう言っただけ寮母さんは頭と脛を摩りながら寮母室へと帰って行った。

「んじゃ、俺等も行くか？」

「そつだな。」

「そうだね。」

エレベーターで上がり、降りて皆で部屋の確認をすると何と俺等の部屋は隣同士だった。
妙な所で寮母さん気が利いてるな。

「じゃあ俺はここだから。また明日。」

「ああ、じゃあな。」

「また明日ね。」

二人と別れ自分の部屋に入る。

――絶句した。

中は部屋が余る程にあり、家具まで揃っている。
それに十人入ってもまだまだスペースがあるようなリビング。
銀色に光るキッチン。

色んな人を数秒で夢へ連れて行きそうなベッド。

本当にこれ学生の寮かよ。悔しいがウチよりスゲーぞ。

荷物がリビングの中央に置いてあったので早速荷物を片付け始めた。
荷物は割と少ないので数時間で終わった。

ふと外を見ると雨がザーザーと降っていた。

うわー気分悪い。

「あー、終わったら腹が減ったな。」

そう思って冷蔵庫を開ける。

オマケ♪

スーパーに着いた時びしょ濡れの鋼と時雨を見て何故かホッとした。

4時間目：初授業は勇者のパーティーと（前書き）

あー、久々の更新です。

4 時間目：初授業は勇者のパーティーと

コケコッガハッゴホッ……………

鶏がむせた気がしたが無視。

ベッドから出ると朝日が心地よく俺を包んだ。

今日は初授業。あのドS勇者の授業が今日から始まる。

はあゝ、またため息か。しかも鬱だわゝ。

どんな授業なんだろうなゝ。

ま、飯食つか。

ゝ数分後ゝ

今、俺のテーブルには豪華な朝食が並んでいる。

昔から一人でしかも叔母さんの分まで作ったからこんな事は朝飯前だ。朝飯前なだけに。

え？寒いつて？気にすんな。

コンコン！

「聖司ゝ！もうそろそろ行くぞゝ！」

「行こうよゝ聖司くゝん。風が止む前にゝ。」

ドアのノックと共に鋼と時雨の声が聞こえた。時雨よ、何言ってるか分からねえぞ。

急いで制服に着替えてドアを開ける。そして、鋼と時雨と小走りで旧校舎へ。

「んお？来たかお前ら遅刻ギリギリだぞ。」

教室に入ると城南先生が教卓の椅子に座りながらP。Pをやっていた。

「あ、やめろやめろ来るな勇者！！あっち行け！！お願いだ魔王だけは！！おい！モンスター共、魔王が連れて行かれるぞ！！」

どうやら城南先生は○者のくせになまいきだをやっているらしい。古いし、いいのか？勇者を倒して。

キンコーンカーンコケッコー！！

「何故途中、鶏に！？」

「お？チャイムが鳴ったな。お前ら席につけよ。」

え？今のチャイム？

まあ、俺にとつては鶏むせてたから調度いいし、気にせず（鋼と時雨は目が点になってたが）席につく。

「んじゃ、始めつか。」

城南先生はそう言うつと椅子を立ち、教卓の上に座る。

「まず最初に何故この勇者科が作られたのか説明するか。」

城南先生はこれまでの経緯を語りだした。

先生は異世界から来たらしく、向こうで魔王を倒した。

しかし、魔王はまた蘇ると言って死んだ。先生は戦いで傷を負い、次に戦う時は前みたいに戦えない。しかも、先生の世界では先生を越える勇者はいないらしい。

先生は考えた結果、他の世界に行けば先生を越える勇者がいるのではないかという事になり、仲間の魔法使いに頼んで仲間達と共にこの世界に来たという事らしい。

「とまあ、こんなもんだ。ちなみにパーティーはこの学校で働いているぞ。」

マジか。

なんとなく驚いていると、鋼が手を上げた。

「何だムダマツチヨ？」

「ムダマツチヨって何ですか!？」

「だって筋肉もりもりのくせに弱いもん。ムダツチヨ」

「地味に省略しないで下さい!!しかも、それだと。マゴツチみたいですよ!!!」

「んで?何だムダツチヨ?」

「無視!??」

「いいからさっさと質問しろやコラ。」

うわぁ……………鋼すんげえ哀れ(笑)

「……………どうして俺らを選んだんですか？」

「あー、ほらお前ら会っただろ？あのバカ銀髪女に。あいつに行かせる前に魔法使いに勇者のパーティー選ぶ魔法を使っただ。するとお前らが選ばれた。」

へえー、魔法って何でもありだな。

そう思っていると城南先生が真面目な顔をしだした。

「こっから大事な話だけだよ。これからお前らにはキツく辛い事が待ってるかもしれねえ。お前らには魔王を倒してもらう事になるかな。もしかしたら死ぬかもしれない。親が居るならやめといった方がいい。別に無理強いはさせないぞ。」

死ぬか……………確かに怖いけど俺には残っている物なんて殆ど何もない。

だから、ここに來たしな。

「先生。俺は大丈夫です。」

「先生。俺もです。」

「私もです。」

俺の後に鋼と時雨が答えた。

こいつらは親がいるんじゃないのか？

「俺は親が小さい頃に交通事故で死んだからな。」

「私は昔、ちょっとした事があって親とは離れて暮らして居るから大丈夫です。」

こいつらも辛い事があったんだな。
それを聞いた先生は力強く頷いた。
そして、俺らに近づき、

「お前、戦士。」

「お前、魔法使い。」

「お前、勇者。」

.....へ？

上から鋼、時雨、俺という順番でそれぞれ肩をポンと叩きながらそう言いだした。

そして。鋼と時雨にそれぞれ紙を渡した。

「その紙にお前らに教えてくれる人の居場所が書いてある。そいつらに剣技やら魔法やら教えてもらいな。」

そして、先生はニヒルな笑みを浮かべる。

「これから、勇者学を始める！！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9570s/>

勇者が俺達に教える事

2011年11月16日05時17分発行